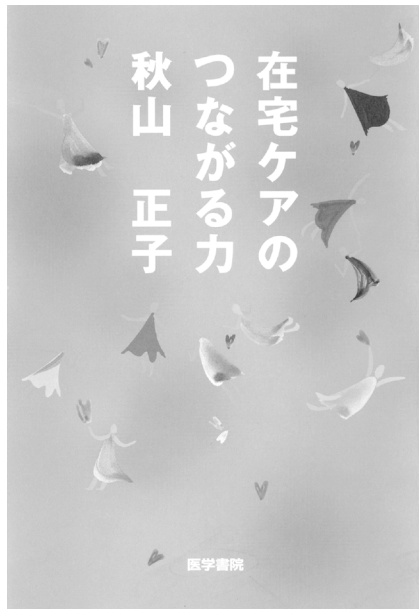




在宅ケアのつながる力

秋山正子＝著

定価1470890円(本体1400円＋税5%)

医学書院 ☎03-3817-5657

2年前に長距離通勤を始め、電車内の読書が毎日の楽しみになっていた。友人から勧められて本書を手にとったその日、あまりの面白さに本から目を離せず、3つある乗換駅でいずれも乗り越しそうになった。

本書は、在宅ケアの領域ではすでに名著になりつつあるかもしれない。しかしその内容は、広く医療現場全体に、そして私たちの毎日の暮らしに、実に大きな示唆を与えてくれる。

第一章・第二章では、秋山さんと仲間の普段の取り組みが、日常の悩みや試行錯誤も含めて、わかりやすい言葉で紹介されている。本当にあれでよかったの？と立ちどまって考えるスタッフの言葉に、

何度もうなずきながら読み進めた。

専門職としても人としても

本を読むときには印象に残る箇所に付箋を貼って、自分の言葉でメモ書きするのだが、本書は付箋だらけになってしまった。いくつか抜き書きすると……。

「講演先の地域の同職種とつながる」「専門性と『隣のおばさん』の普通さをあわせもち、通訳になる」「答えは利用者の中にある」。これらはみな、職種や現場の種別を超えて、多くの人に響くアドバイスだろう。自分の専門性を発揮しようとするほど、その仕事は「誰のために」「何のために」あるのか見えなくなることもある。医療者が「よかれと思うこと」が、利用者・患者の希望にマッチしているとは限らないのだ。

「うまく連携できない相手に対して怒るのではなく、自分をふりかえる」「連携できない相手にも時間をかけてしごとくアプローチする」「ヒステリックではない、きちんとした自己主張」。これらは、仕事の文脈を超えて印象に残った。誰でも、つきあいにくい（が、つきあわねばならない）相手をもっている。自信をもって冷静に自己主張をすること、そしてしごとく相手の変化を待つ辛抱力を身につけることも大事だろう（なでしこジャパンも優勝したではないか！）。

第三章・第四章は、秋山さんが参加したシンポジウムや視察の報告だが、前半の章と有機的に結びついて、さまざまな実践、そして人間の生き方や看取り方について、読者に考える種をまいてくれる。

つながらなければ始まらない

この数年、私はがんと診断された本人や家族の「その後」に関するがんサバイバーシップ研究に取り組んでいる。その研究と実践場面では、「つながらないと始まらない」ことも多い。

私はもともと内科医で、現在は医学生への教育にも関与しているが、本書を読んだ、チーム医療教育のなかでもっとも重要なのは「医師の『つながる力』の強化」ではないか、と感じた。つながる範囲は、病院内だけではなく「地域全体」である。自分がすべてをわかっているとか、すべてをしなければと思うのではなく、もっとうまくできる人を探して自分からつながること。それができれば、医師自身が今よりも楽になるだろう。つながる相手を見つけやすくする工夫も必要だ。

「平らなネットワーク」の一部に連なることの楽しさを教えてくれる一冊である。